

シンポジウム報告

極私的国際学会報告 — 第9回アジア・太平洋畜産会議報告 —

八代田真人
岐阜大学農学部

はじめに

第9回アジア・太平洋畜産会議（以下、AAAP）は、オリンピックを2ヵ月後に控えた2000年7月3日から7日までの5日間、オーストラリア、シドニーのニューサウスウェールズ大学で開催された。後日、滞在したホテルのすぐ側を高橋尚子が駆け抜けてゆくことになるのだが、AAAP開催当時のシドニー市民の話題は、もっぱらOGフットボール（オーストラリア式ラグビー）と7月1日から導入されたGST（消費税）でもちきりのようだった。

今回のAAAPは口頭、ポスターを合せ発表数568題あり、本来なら発表の内容と討論の概要を報告すべきだが、私個人の興味そして能力不足（とくに語学能力）のため到底その任を負えない。また、北海道畜産学会の特徴として研究者だけでなく、農家、普及所、学生など、あまり「学会」とは縁のない方々も多く加盟している。そこで本稿では「国際学会」とはどんなものなのかを極私的視点から報告することとしたい。なお、当然、学術的な点に興味をお持ちの方も多々おられることと思う。幸いなことに、私の気付いた限りでも帯広畜産大学、北海道大学、北海道農業試験場、酪農学園大学から各2-3名程の参加者がおられた。それぞれ、講演要旨集あるいはその内容が記録されたCD-ROMをお持ちのハズなので、お近くの機関に問い合わせ、借受けて頂くことでご容赦願いたい。

準備

AAAPへの参加申し込みの期限は1999年9月30日。実は、私が参加を決めたのはその前日だった。昨今、日本の学会でもそうなりつつあるが、参加申し込み、講演要旨の送付などは、ほとんどインターネットを通して行われている。インターネットに接続されたコンピューターさえあれば、世界中どこからでも瞬時にして参加を申しこむことができる仕組みだ。その後、発表予定である自分の研究を1ページ（あるいは4ページ）に簡潔にまとめた講演要旨を提出する（もちろん英語）。この要旨提出の締切が2000年2月28日（実際には少し延長された）で、開催日のおよそ4ヵ月前。これもインターネットを通して送付する。この努

力？ の結晶が、開催日当日に、一枚のCD-ROMにまとめられ参加者に手渡された。

発表

実際の発表は、ポスターによる発表と口頭による発表の2つの形式からなる。ポスター発表の場合には、講演要旨とは別に、およそ1m四方のポスターを準備して会場に持込むことになり、口頭発表の場合には内容を説明するスライドなどと10分程度の英語によるスピーチを用意して乗り込むことになる。原則として参加者は、参加申し込みの際にポスターか口頭発表のどちらかを選ぶことになっている。私がポスター発表を選んだのは言うまでもない……。

1. ポスター発表

今回の学会のポスター発表は、1・2日目、3日目、4日目の3つの発表日に分かれ、合計400題が発表された。主催者側の事前の指定では、1.2×1.2mのポスターサイズだったにも関わらず、いざ会場に着くと、ポスターを貼るボードが指定サイズより明らかに小さい。結局、日本を含め何カ国かの参加者は、スペースを分け合い、ボードからポスターがはみ出したままの発表というハメになった。ポスターは、朝の8:30から、一応夕方4:00まで掲載することになっている。ポスター発表と同時に口頭発表も行われているため、参加者の多くは午前、午後の30分の休憩時間とランチタイムに昼食を片手にポスターを見学することになる。ポスター発表者はランチタイムのうち1時間、自分のポスターの前に立ち、見学者の質問に答え議論を交わす。

私の発表内容が「放牧」であったことと、開催地が放牧の盛んなオーストラリアであったため、幾人かの見学者が訪れ、議論できたことは幸いであった。オーストラリア北部（つまり亜熱帯）の研究者との議論の中で最も興味深かった、というよりは痛感したのは農業の地域性である。以下、簡単に議論の内容を再現する（ちなみに、研究内容は、低草高を維持して放牧した場合の牧草生産と乳生産への影響であった）。

「20とか30cmの低い草高で放牧したら、夏には牧草が無くなってしまわないのか？ どうやって放牧し

たんだ。」「牧草の生長量を測りながら、輪換計画を立てたんです。」「どうやって、牧草の生長量を測ったの?」「放牧前後の草量を繰り返し測れば、生長量が推定できます。」「理屈ではわかるけど、現実的にそんなことが可能?」「? どうして……?」以下続く……。

お気づきの方もいるかもしれないが、この議論には2点かみ合わないことがある。一つは、亜寒帯(北海道)と亜熱帯では、牧草の季節生産のパターンが、かなり異なることである。もう一つは、私が実験で扱った放牧地はせいぜい1-2ha(それでも日本国内の実験では最大規模に属すると思う)であるのに対し、オーストラリアの放牧地はもっと広大であったためであろう。おそらく、10ha程度であるなら、先の方法で牧草の生長量を測定することも無理ではないが、それ以上となると現実的に不可能なのである。

多くの国の参加者がいるため、ともするとこうした行き違いが生ずる。口頭発表でも、タイの小自作農的酪農の経営について、タイ人の研究者がタイ酪農の現状を、オーストラリア人研究者に熱心に説明する一幕が見られた。しかし、こうした一面もまた相互理解には欠かせないのではないだろうか。

2. 口頭発表

口頭発表は、4つの会場に分かれ、1・2日目は乳牛、肉牛、草地生産に関する話題を中心に、3日目は肉牛、羊、家禽などに関する話題を中心に発表が行われた。発表は、スライドやOHPなどを使い、10分間のスピーチの後に、5分間の質疑応答が設けられるという形で進んでいく。ここでは、乳牛分野のことにについて述べさせていただく。

乳牛分野の口頭発表は、栄養、生産、経営を合せて21題の発表が行われた。このうち個人的に興味深かったのは、放牧による牛乳生産に関する2つの報告だった。一つは、WUE(Water Use Efficiency)という指標で乳生産の効率を検討した報告である。これは、牧草生産のために灌漑が必要な地域において、灌漑水1メガリットル当たりの(乳脂肪+乳タンパク)生産量で乳生産の効率を表すというものである。この指標を用いて170戸の酪農家を調査したところ、農家間で3倍もの効率の違いがあり、WUEの低い農家では、補助飼料の給与が不適切であるために、灌漑水によって生産された放牧草の摂取量の低下を招いていることが報告された。日本では考えられないユニークな指標であること、一方で放牧を利用する上での問題点は日本と同様であることが二重の意味で面白かった。

もう一つの報告はいわゆる研究報告とは異なり、放牧を主体とした酪農地域において、酪農家自身が調査者として、その地域の放牧酪農の問題点を解決していくというプロジェクトの方法論とその評価である。この方法は4段階から構成される。すなわち、地域の酪

農家が集まり ①現在の放牧管理の問題点、成功を妨げている要因を整理する ②農家自身の調査と議論から解決すべき問題の優先順位をつける ③管理の異なる農家を選び簡単な実験およびその評価をする ④上記の結果から成功した方法を見つけ、なぜ成功したかを検討する。そして、普及する という過程で行われる。この試みは現在②段階目まで進んでいるが、積極的に議論を重ね段階を進めていく地域と伝統的な「普及」モデルから離れられない地域はあるようだと言っていた。放牧に関する限り、現在の日本では、グループを作って自身で議論や調査を重ねていくというスタイルは少数に属すると思う。そうした点からこの報告は興味深かった。

パーティとツアー

国際学会は、各人の研究成果を発表するだけではない。普段なかなか交流することのできない各国の研究者が、意見を交換することのできるまたとない場でもある。このため、学会の中日にはディナーパーティ(日本風に言えば懇親会)が開かれる。また、オーストラリアの畜産に触れる機会を作るために、今回の学会では、開催前と開催後に合せて3つのツアーが用意されていた。1つ目は、オーストラリアの羊産業界見学コース、2つ目は山羊、鹿、ラマ、エミュー、ダチョウ、クロコダイルなどオーストラリアで成長しつつある新しい畜産業を見学するコース、3つ目は熱帯地域における酪農業を見学するコースであった。個人的な日程の都合上、いずれにも参加することはできなかったが、こうした企画も、各国の相互理解を深める上で重要なものであろう。

国際学会雑考

今回の国際学会に参加して、コミュニケーションの壁を痛切に感じた。その問題を私の語学能力の無さで結論とするのはたやすいが、いくつか気付いた点について述べておきたい。

国際学会であるため英語が公用語であることにいまさら異論はない。しかし、今回の開催国が英語を母語とするオーストラリアであったため、発表者、質問者ともに多勢を占めるオーストラリア人であると、非英語圏の聴衆は議論についていくのが難しかった(と思う)。言うまでもなく、国際学会は語学力を競う場ではない。とすれば、少なくとも公の議論の場では、ゆっくり、簡潔にしゃべることを共通認識とできないものだろうか? 座長の中には、発表者、質問者に対してゆっくりしゃべるように注意していた方もいらしたが、全体的な認識はまだまだのようであった。とくに、英語が下手と言われる我々日本人は、このことをもっと強く主張すべきではなからうか。

もう一点は、講演要旨のCD-ROM化である。およそ

500 題もある講演要旨を本にすると百科事典 1 冊分以上になる。これを会場や日本に持ち運ぶ苦勞は、皆さんも想像に難くないと思う。これが、全て CD-ROM 一枚に編纂された訳だから、持ち運びには何の苦勞もない。しかし、CD-ROM になったことにより講演要旨が手元にあるにも関わらず、ノートパソコンでもない限り、予め発表の概要を知ることができない。とくに英語を第二言語とする人間にとっては、予備知識のあるなしは、発表内容の理解度を大きく左右するだろう。これもコミュニケーションを考えた場合には大きな問題ではなかろうか？ 主催者の苦勞、著作権などの問題を無視して言う（技術的には何の問題もないはずである）、CD-ROM が完成した段階で、同時にホームページ上に要旨を公開して頂けると、興味ある発表のみ印刷して、学会に臨むことができるのだが、と思わずにはいられなかった。

おわりに

開催地となったニューサウスウェールズ大学は、閑

静な住宅街に囲まれ、芝と林の広がる広大な敷地をもつ美しい大学であった。大学から 30 分も歩けば、オリンピックビーチバレーの行われたボンダイビーチにたどり着くという。秋を迎えたシドニーは、長袖は必要なものの北海道の秋に比べずっと陽気であり散策を楽しむには調度良い気候だった。時差がほとんどないこと、物価水準が同程度であること、華僑が多く、東洋人である自分がそれほど浮き立たないこと、食事もフィッシュ&チップスから中華料理、タイ料理まで豊富な種類がそろっていることなどなど、日本人である私にとっては比較的なじみやすく、過ごしやすい環境であった。とは言っても、シドニーはこの巨大な大陸のほんの一点に過ぎない。中央部には広大な沙漠を持ち、北と南、西と東では気候も大きく違う。そこに展開される畜産も当然、多種多様な形態で営まれていることだろう。時間的な余裕から、その多くに触れることができなかったのが、今回の心残りである。

